



天象

月

【月】 入る月の 海の月 江の月に 神と
 月 君は月 冴えよ月 深夜の月 すむ月
 に 月入れたる 月うすき 月小田を 月
 落ちて 月清し 月きよみ 月くらく 月寒し 月代
 に 月すみて 月ぞうき 月たけて 月なれや 月に
 あそべ 月になく 月に映え 月に耽ちて 月の色に
 月の顔 月の澄む 月のせて 月の船 月の前 つきの
 むまや 月は淡く 月は老い 月運ぶ 月は船 月はよ
 し 月人の 月ひとり 月ふくる 月見めと 月も見つ
 月も見で 月宿る 月雪を 月を入れて 月を帯びて
 月を思ふ 月を籠む 月を挟む 月を吹いて 月を見
 し 月を良み 月読の 照る月も 花に月 昼の月
 冬の月 窓月の 水の月 よべの月に 夜半の月 涼月は
 ●あかでも月の 秋田の月に 秋夜月 浅茅の月の
 雨気の月の 天ゆく月を あらしに月の いさよふ月に
 出づるは月の 出で来る月の 入りぬる月の いるさの
 月に うかぶ月かな 憂き世に月の 薄い夕月 うつろ
 ふ月を うわさ聞月 落ちたる月の をのへの月に 娥

捨の月に 朧に月は 隠るる月を かたぶく月に 神
 代の月も 枯野の月は 川づらの月 かはのせの月 か
 はらぬ月の 寒谷の月 けふ月のわに けふの月かも
 きりふる月に 雲居の月は 心と月を こずゑの月に
 木の間の月に 孤峰の月を こよひの月を さえたる月
 は 里には月は 里分く月の さやけき月を 更科の
 月 山月は寒し 三秋の月 しづまる月の し、の、めの
 月 霜夜の月を 春王の月 白毛の月の 白き月をも
 新月の色 新秋の月 すこき寒月 澄める月かな 千
 秋の月を 底まで月の 空ゆく月も 旅こそ月は 旅
 なる月の 月出しこそ 月いでまじる 月いと明かき
 月入る山も 月おし照れり 月落ちかねや 月おもし
 ろし 月海上に 月傾きぬ 月かも君は 月清ければ
 月きら／＼と 月こそ色は 月こそ草に 月さへあやな
 月さへさやに 月さえわたる 月さしいで、月さむし
 とや 月さゆる夜の 月しなれば 月斜窓に入る
 月冷まじく 月すゝり泣く 月すむうらを 月すむ空に
 月すまじと 月すむ峰の 月ぞうつろふ 月ぞ傾く

美

状態

【美し】美しくいき いくくして いと美々

しく 愛しき うつくしげ うつくしむ
美くしや 美し君 真善美 西施の美 美

人にて ●あな美しやな あらうつくしの いくうつくし
げ うつくしかりつる うつくしきこと うつくしきち

ご 美しき時 美しき人 美しき姫 美し君の うつく
しきもの 美しく甘き うつくしければ 美しとのみ

うつくしうきよら ことに美しく 白ううつくしう
露のうつくし 虹うつくしく 美女が首をば 美女に月

ふれ 美人は言はねど 人うつくしき 美男におはす
びびしきをのこ みなうつくしき 見るにうつくし

ゆ、しう 美し／色の眼を 迦陵頻なる 翠黛紅顔 嬋
娟たる 桃李の装ひ 暎は芙蓉 天桃の

【清げ】「美しい。きれいだ」 いと清げ 清気なる 灰清げ
に ●あたら清し女 清げなるをのこ 清げなる人 清

げなる童 きよげにものを 車清げに 庭いと清げ
花の 花の頸は 花の唇 花のたもとに 花の錦を

厳し いくくしう ●あないくくしき 厳し気なれば い

つくしきかも 厳し気なり はえていくしき

丹つらふ 顔が赤く照り さ丹つらふ 丹の穂なす ●丹つらふ
妹は 丹つらふ君を 丹の穂の面

あえか なよなよは あえかなる なよびかなる なよび
かに ●あえかに見えたまひ

【麗し】美しかり 麗はしき 愛しと うるはしみ ●
色うるはしう うるはしき糸 うるはしき髪 うるは

しみせよ 形美し 髪うるはしく 大和しうるはし
美麗 美麗物 美麗なる ●形美麗に 端正美麗

麗し・細し・妙し うら麗し 麗し妹に 麗し女を 花
妙し まぐはしも ●あやにうら麗し 糸の細しき 色

ぐはし子を くはし少女が 妙しき山ぞ くはしはし
ばみ くはし若芽は ま麗し児ろは まぐはしみかも

妙なり 妙なりし たなれど 妙音の ●妙なる蓮
文花の微妙

【可愛し】愛盛り しほらしく つほいなう わが目
妻 ●男かはゆし 馴れてつほいは

らうたし いらしい 労たきこと らうたげなり らうた

安



心

【安し】安らかに あな安らけ あら楽や う

らもなく 国やすく 平らかに たいらけ
く 目を安み やすげなり 安らかに 平

安の●心はやすく 心やすくぞ 後世安穩に 死なは

安けむ 父よ安かれ 馴れ安らかなる 幣も安けし

みるも気安き やしうゐたりと 安く老いぬる やす

くおくれる 安く寝る夜は 安く肌触れ やすく待ち

つつ 安席かも 宿屋安けし ゆくすゑやすく

【真幸く】無事に ま幸くあらば ま幸くま

せと 真幸くもがも／親の無事 ことぞともなき 事

も無く 障無く 恙むことなく 全くしあらば

【和ぐ】穏やかに 和ぎむかと 和の今 なごむまで●今

ぞ和ぎぬる ところ和ぐもの 心なごみき 心はなごめ

り 潮の和みぞ 和ぎなむ時も 和ぐる日もなし 和

には吹かず 人をも和し 見和ぎし山に／影やはらぐる

【慰む】なぐさ 慰まず なぐさまば 慰むと 慰めに 慰め

む●おもひなくさむ 心慰に しばしなくさむ 慰

さまざま目に 慰む方は 慰むやとぞ 慰むれども 慰

めがたき 慰めかねつ なぐさめぞなき 慰めつべき
なぐさめてまし なぐさめにしも なぐさめわぶる

ほどぞなくさむ 身をぞなくさむ 夢に慰む

【穏し】平穩におど おいらかに おほどかに ゆほびか

なる ゆほびかに ゆくらかに ゆくらくら●鶴おほ

どかに ゆほびかにてぞ ゆららさららと

静心「落ち着いた心」 静心 しめやかに●しづ心なし

【寛】ゆた ゆたならば●潮干のゆたに しづけくゆた

に その夜は寛に ゆたにあるらむ ゆたに見えけり

寛けし ゆたけきかも ゆたけくも●海もゆたけし

姿ゆたけき 手本寛けく 寛けき見つつ ゆたけきも

のは ゆたけきを吾は 寛けく君を ゆたけに解けて

緩む 心ゆるびて たづなゆるすな ゆるふことなく

ゆるぶばかりを ゆるむまに／ゆるりと寝るか

心長し 心長き人 心ながくも 長き心を

【長閑】のどか のどかなる 長閑なれ 長閑にて 長閑けき

に のどけくて のどけさや のどやかに●あしたのど

けき 音ものどかや かげぞのどけき 影のどかなる



住

室

【間】「寢室」 鬼の寝屋 寒間に 紅間を

紅房の 春間も 深間に 間ちかき 間の

外に 間の中に ●雨夜のねやは 間中ただ

ひとり さしいるねやの 翠帳紅間 間寒くして ね

やぞゆかしき 間にしる哉 間には黄金の 間に吹き

くる 間の灯りの ねやのあたりに 間のくろかみ ね

やの月影 間のももし火 間の隙さへ 間のふすまの

間へも入らじ 間洩る月が 班女が間の むなしき間の

わが間のうちに / よどのさへなじ

妻屋 寝室 さ宿し妻屋に 妻屋さぶしく 嬌屋の内に

臥所「寢床」 臥所あせぬと 臥所はなれば

【室】 室に入りて 新室の 室の梅 葉室の 幽室に

蘭室に ●かうちのむろや 校正室の 巫祝の室と 隣室の三味

こもれど まらうどみなと 室のとほそを 隣室の三味

部屋 牛部屋の 坐敷哉 茅葺は ●養蚕部屋の

【間】 不開の間 奥の室の 間借して ●一室を薫す

板間 板敷を 板間より ●あくる板間を 間の板間も

ふける板間の ほそき板敷 / 土間のしめりに

【廁】 廁に来て 雪隠に 野雪隠 ●くそふくにして

【戸】 あふり戸や 朝戸開けて 裏戸出でて 玻璃扉

に しばのとに 扉を敲く ひはり戸や 槓の戸も 和

ら戸を ●朝戸を開き 奥の遣戸を くらす松の戸 来

しと戸をうつ 柴の編戸を 柴の戸あけて 竹の編戸に

叩く妻戸は 戸を吹きあけて 引立戸かな 真木の戸

たたく 御戸開くめる 宿の妻戸を 屋の戸押そぶる

山桜戸を 我は妻戸に / 明た潜りも

【扉】 いで、とほそに 君が扉に 苔のとほその 小簾

の扉は 谷の戸ほそに 竹扉を開けば 扉に彫れる

戸ほそ閉ちてし 真柴の扉 松のとほそを 瑪瑙の扉を

格子 格子戸の 御隔戸を ●格子な上げそ

【戸】 小藪より 小半藪 立藪

戸閉す せきし戸を とぎしつ、 戸を閉てつ ●草の戸

ざしに ささず寝にけり ささで明けゆく 鎖すなら

鎖さい 鎖さぬ折木戸 戸も閉してあるを

掛金「鍵」 障子の懸金 遣戸の懸金 / 小ひさき鍵を

【窓】 閉窓に さはる窓 山窓に 窓囲む 窓越しに